

# ◇事例紹介◇

県北は温泉の町、奥津の山間で農業を愛し、黙々と努力を続け、特に和牛を中心に経営の合理化に若い情熱を燃やしている青年がいる。この人こそ昭和 38 年 3 徳賞を受賞した石原幸一君である。

和牛生産の多頭飼育は全国的にみても極めてめずらしい事例であり、ここに皆さんに紹介するわけである。今後、石原君の健闘を見守りたいと思う。



和牛の経済性が強く批判されている時、ここに紹介するのは和牛生産を主体にして、山間僻地、しかも従来の完全放牧の習慣を脱皮し、経営合理化に全力を傾注して昨年 8 月畜舎の改善を終了、第 1 歩を踏み出した石原君の和牛経営です。

奥津町の家畜飼育頭数 (38・10 調べ) は和牛 536 頭 (成牛 316 頭、子牛 220) 豚 33 頭、緬山羊 81 頭、鶏 1,300 羽となっており、和牛の飼育頭数別農家数は 1 頭飼 50 戸、2～3 頭飼 60 戸、3～4 頭飼 30 戸、5 頭以上 10 戸となっています。石原君の部落は農家戸数 7 軒で、和牛飼育平均頭数は 5 頭です。

次に石原君の家族は 7 人ですが、労働実務者は 3 名 (本人、妻、母) であるので年間役 20 人歩雇傭しており、経営耕地は水田 80 a、畑 20 a、山林 10ha で、和牛頭数は成牛 8 頭子牛 4 頭飼育しています。その他として椎茸原木を 8,000 本 (昭和 40 年より採取予定) 所有しています。

以上のごとく労働実務者 3 名で一毛作田と畑耕作に従事していたのでは、所得はわずかですが、昨年の大飛躍といえる和牛の多頭飼育に踏み出したことにより収益性を高める構想は、繁殖雌牛を 10 頭繁養して毎年子牛を産ませ、この中より優良雌子牛は繁殖素牛として保留、売収益は犢と老廃牛を併せて、現段階は粗収年 30 万円であるが、昭和 40 年には 100 万円、7 ケタ農業を目標にしています。

この経営上の診断となるべき点については、途上

につき見解を差し控えますが、飼料、数料の不足、また人手不足解消のための農機具の購入等、まだ問題は残されておりますが、飼料の点については昨年、本年ともに青草飼料 (イタリアン) を苗代用地のみ残して播種しており、当初の計画を軌道に乗せるべく固い決意で頑張っておられます。

畜舎の構造は図のとおりであり、これの建設費は計 82 万円かかっております。みなさんの御参考になればと思います。

総合畜連津山支所 山田八千穂  
(標題の写真は石原氏の完成した畜舎の全景です)

